

「きたまち逍遙」記

花冷えのする3月30日、「きたまち逍遙」は16名の参加者のもと、依水園から始まった。池泉回遊式庭園と呼ばれる日本庭園では、二つの大きな池のまわりに小径がつけられ、築山、ところどころに東屋や水車が配置されて、折しもほころび始めた桜が庭を彩り、しばし日常を忘れさせてくれる場所であった。

次に訪れたのは「入江泰吉旧居」である。入江亡きあと、妻によって奈良市へ寄贈されたこの住まいは、一般公開できるまでに整備され、今日に至っている。当時奈良市の職員であった

(洛遊会世話人)西崎氏も遺品整理に加わっていたが、そこに入江宛の武者小路実篤からの書簡を発見し、手が震える思いをしたそうである。現在、この書簡は高畑町にある「入江泰吉記念奈良市写真美術館」に納められている。この旧居の見どころの一つは客間から見える庭であり、秋には窓が枠になって紅葉を一幅の画として楽しむ。



その後、ガイドさんの説明を受けながら、「転害門」から、元南都銀行手貝支店であった「奈良市きたまち転害門観光案内所」、癩病患者を救済保護する目的で、おそらく13世紀に開かれた「北山十八間戸」とまわった。ちなみに「転害門」のしめ縄は四年に一度掛け替えが行われるとのことで、今年の九月がまさにその時に当たるとのこと！また寺院に神社のしめ縄とは不可思議であるが、日本は神様の国で、仏教は新参者であったので、神様が仏教を護るという意味で、この大しめ縄が飾られているという説明がガイドさんからあった。



この頃にはすでに胃袋も糧を求めてうるさくなり始めており、お待ちかねの薬膳料理「茉莉花(ジャスミン)」に立ち寄ることになった。季節の変わり目ということから、今月は自律神経を整えるために肝臓に働く薬膳料理が提供された。コースが二つ用意されており、それぞれ自分の好みで選んだが、両コースに共通し「竹スープ」をベースにした一品があった。竹スープとは文字通り、竹を干したものを汁にしたスープであるが、干物のようになった竹スープの

素の実物を見せていただき、これまで見たことのない食材の話題で食卓は大いに盛り上がった。昼食

後、星野リゾートによるプロデュースでホテルに生まれ変わる、重要文化財「旧奈良監獄」に向かった。封鎖されて敷地内に入ることができなかったが、監獄はジャズピアニスト山下洋輔の祖父が設計し、内部がパノラマ構造になっているとのことである。

「放課後」編：この後、さらに一部の参加者とともに、「植村牧場」を訪れた。ミルクたっぷりのソフトクリームに舌鼓を打ち、生まれてひと月ほどの仔牛の撮影に忙しくしたあと、長谷川テルの記念碑が建立されているという「般若寺」に向かった。花の季節ではないのは残念であったが、記念碑を見て、カンマン石に腰や腹を押し付けて健康増進を祈願でき、大満足の「きたまち逍遙」のフィナーレであった。